

V 総合的なまとめ

調査結果をもとに、子どもの多様な生活実態、学習や生活に関する意識、保護者の教育や子どもに対する期待を明らかにしてきた。また、平成10年度から5年毎に行ってきた過去4回の調査結果と比較することによって、経年の変化を把握し、傾向を探った。それらの結果を総合的にまとめ、以下の4点に整理することとした。

1 子どもの家庭生活について

(1) 生活習慣

過去の調査を通して見ると、全体として、起床時間が早くなっている傾向にある。また、朝食については、8割以上の児童・生徒が食べている。夕食については、「家族全員で食べる」と「全員ではないが家族そろって食べる」とを合わせると、8割前後である。しかし、「家族全員で食べる」の割合を5年前と比較すると、小学校では6.4ポイント、中学校では2.1ポイント減少している。子どもの習い事や塾などの影響があると考えられる。

(2) 家庭での過ごし方・休日の過ごし方

帰宅後の活動については、小学生は、テレビやビデオを見て過ごすことが7割強、中学生では、Youtubeなどの動画視聴が8割弱と最も多かった。Youtubeなどの動画視聴は、今回から新たに追加した項目で、小学生でも3番目に高く、6割強であった。また、ゲーム機等で遊ぶ割合は、小学生、中学生ともに2番目に高かった。

友だちと遊ぶ人数については、小学生では3～4人が4割弱と最も高いが、中学生では自分1人で遊ぶが3割強と最も高かった。中学生の「Youtubeなどの動画視聴の割合が高い」という結果に関連していると考えられる。

休日の過ごし方については、小学生は親子で過ごし、中学生は部活動をするが多かった。また、小学生、中学生ともに、家でのおんびりする、友だちと遊ぶという回答も多い。

手伝いについては、中学生において「よくする」が増加傾向にある。小学生、中学生ともに、食事の用意や片付けなどが年々増加しており、多くの子どもが行っている。

全体としては、起床時間が早くなっている傾向にあり、朝食については、8割以上の児童・生徒が食べている。今後も、早寝・早起き・朝ごはんを意識した生活習慣に取り組み、子どもたちの健やかな成長のために生活環境を整えていくことが大切である。

家庭での過ごし方については、Youtube視聴やテレビ、ゲーム等、家の中での遊びが上位を占めている。スマートフォンや、パソコン等は便利なツールではあるが、友だちと遊んだり、会話したりする時間も大切にさせたい。学校においては、大人や友だちとのコミュニケーション能力を高めるための支援を引き続き行っていきたい。

2 家庭での教育と親子関係について

(1) 家庭での教育

多くの家庭が、子ども中心の毎日を送っていることがわかる。この項目は、年々増加傾向にあり、今回の調査で初めて5割を超える結果となった。また、塾や習い事等にお金をかける割合も増加傾向にある。中学生の保護者では、今回の調査で初めて、5割を超える結果となった。家庭生活は、時間も費用も子どものために多く使っていることがわかる。反対に、しつけや教育について自信があると回答した割合は、2割にも満たない結果であり、子育てに対して自信が持てない様子がうかがえる。このことが、学校に多くのことを求める傾向につながっているように思われる。

「子どもについて悩みがある」の割合は、年々増加傾向にあったが、今回の調査では初めて減少した。それでも、小学生保護者では6割弱、中学生保護者では6割強と、悩みを多く抱えているといえる。小学生保護者の悩みは、子どもの性格や行動面の割合が高く、中学生保護者の悩みは、学習や進路に関する割合が高くなっている。

(2) 子どもと保護者の認識や考え方の違い

ほとんどの家庭で、毎日朝食を摂らせるように心掛けるなど、子どもの健康に気を配っていることがうかがえる。友だちとの関係に気をつけている割合も高い。勉強時間を守らせることは増加傾向にあり、家庭学習への意識の高まりを感じる。また、近所の人への挨拶は高まっており、保護者の挨拶に対しての意識が高まっている。

一方、注意されることとして、子どもが挙げていることで多いのが、勉強のことや身のまわりの片付けについてである。保護者はそれほど勉強のことについて、子どもに口うるさく話していないつもりでも、子どもとしては、よく言われていることとしてとらえていることがうかがえる。逆に、友だちづきあいについて、保護者としては気にかけていることが多いが、子どもは、それほど重く感じていないようである。

(3) 価値観

「染髪・ピアス・化粧」をすることについて、保護者の回答は、「大人になってから」「高校生になってから」の順に「してもよい」が多い。「大人になってから」は、前回の調査より減少しているが、それとは反対に、「高校生から」が増加している。

子どもの回答は、「染髪」に関しては「大人になってから」と答える割合が増加しており、「中学生から」の割合が減少している。しかし、「染髪・ピアス・化粧」とともに「小学生・中学生から」してもよいと答える割合が保護者よりも多く、早い時期からしてもよいと考える子どももいる。

「携帯電話やスマートフォンの所持」については、保護者は、「大人になってから」や「持つべきではない」という考え方が前回より増加した。子どもは、「小学生高学年」、「中学生」との回答が多く、「大人」「そうしてはいけない」という回答は少なかった。

子どもが将来にどんな人になってほしいかについて、保護者は「人を思いやる優しい人」になってほしいと思う割合が最も高い。続いて「自分の考えをしっかりとって行動する人」「人に迷惑をかけない人」という結果であった。

（４）家庭での会話

ほとんどの子どもも保護者も、「話す」と回答しており、９割近くである。親子の対話を大切にする傾向が強いと考えられる。会話の内容に注目してみると、「学校のこと」や「友だちのこと」が多く、「家族のこと」「世の中のできごとやニュースのこと」「性格や行動のこと」「進路、将来のこと」「体や健康のこと」は２割以下となっており、気軽に話し合える話題が中心になっているようである。

子どもについて、どの程度知っているかについては、「よく遊ぶ友だちの名前」は、小学生の保護者では９割半ば、中学生の保護者では、９割弱であった。しかし、子どもの内面に係る「今悩んでいること」については、小学生、中学生の保護者ともに、他の項目よりも低く、内面的なことでは、保護者よりも友だちに話す傾向が強まっていると考えられる。

相互理解の面から見ると、「保護者は自分の話を真剣に聞いてくれている」と思う子どもが、調査毎に増加している。また、家の人を尊敬している割合は５割を超えており、小学生の方がその割合は高い。中学生では、「自分にかまう」、「自分に厳しい」が減少し、「自分に甘い」が増加した。

子どもたちは、時には厳しさを、時には愛情を感じながら、家の人からの理解を実感しているようである。

これまでの調査と同様に、多くの家庭で、子どもの健康に気を配りながら、親子の会話を大切にし、子どもとのコミュニケーションを図っているようである。しかしながら、子どもについて悩みがある保護者の割合は、今回の調査では減少したものの６割程度いることがわかる。小学生保護者の悩みは、子どもの性格や行動面の割合が高く、中学生保護者の悩みは、学習や進路に関する割合が高くなっている。

親子の会話では、９割以上の保護者が子どもとよく話をしており、会話の内容は、「学校のこと」や「友だちのこと」の割合が高い。しかし、小学生、中学生の保護者ともに、子どもの内面に係る「今悩んでいることを知っている」と回答した割合が、３割強という結果からも、より一層子どもに寄り添える家庭環境を作っていくことが大切である。子どもたちの健やかな成長のためにも、家庭と学校、そして地域が連携し、何ができるかを具体的に模索し、実践を積み重ねていきたい。

3 子どもの学校生活と保護者の教育に関する考え方について

(1) 学校での学習と教師への要望

教科に関する調査において、上位のものは、小学生では体育・図画工作・家庭科である。中学生では保健体育・数学・社会である。「好き」が増加傾向にある教科は、小学生では、社会・道徳・学級活動、中学生では社会・数学・英語である。小学生に比べ、中学生は「どちらともいえない」に多く回答している。

教師への要望については、小学生、中学生ともに、「勉強をおもしろく教えてほしい」が最も高く、小学生は6割強、中学生は6割半ばである。やめてほしいことで最も高いのは、小学生では「宿題をたくさん出す」、中学生では「えこひいきをする」である。「してほしいこと」では、「特にない」が増加している。

(2) 家庭学習と通塾

家庭学習については、小学生、中学生ともに、「学校の宿題」の割合が最も高く、小学生が9割半ば、中学生が7割半ばの結果になった。続いて、小学生では「テスト勉強」「調べ学習」「授業の予習・復習」、中学生では、「テスト勉強」「学習塾の勉強」「授業の予習・復習」となっている。

通塾については、子どもと保護者の回答に若干の差が見られる。子どもは、「成績を上げたい」の割合が最も高いが、小学生の保護者は、「受験に役立つ」や「1人では勉強しないから」の割合が高かった。中学生の保護者は、子どもと同じ「成績を上げたい」の割合が最も高かった。

(3) 学校への適応とストレス

いじめについて、小学生、中学生ともに、過去1年間に「いじめをした」「いじめを見た」の割合が減少した。「いじめを止めた」ことについては、小学生が6割強、中学生が4割半ばで、ともに増加している。

学校への適応について、「学校へ行きたくない」が、小学生で増加した。小学生、中学生ともに5割を超えている。学校へ行きたくない理由の上位が、小学生では、「体の調子が悪いとき」「なんとなく不安なとき」、中学生では、「行くのがめんどうなとき」「体の調子が悪いとき」である。

ストレスについては、小学生では、「夜眠れない」「疲れやすい」「イライラする」「おなかが痛くなる」などが増加し、中学生では、前回調査からどの項目も減少した。

(4) 学校への期待と教育問題に対する考え方

学校教育に対する満足度は、すべての項目で「とても満足」「満足」が増加傾向であり、特に中学校では顕著である。しかしながら、すべての項目で、小学校、中学校ともに「とても満足」の回答は少なく、「どちらでもない」の回答が多いことが課題である。

学校に期待することの中で最も高かったのが「心の豊かさを育てる教育」である。また、小学生、中学生の保護者ともに「進学に役立つ学力のつく教育」を望む割合が増加傾向である。

保護者の教育に対する考え方として、小学生、中学生の保護者ともに、割合が最も

高い「これからは男の子も家事ができるようにしつけるべきだ」は、平成15年度の調査をピークに減少したが、今回の調査では増加した。また、「学校では、もっとゆとりのある教育をすべきだ」は、平成10年度の調査から著しく減少した。

「登校強要は不要」は、小学生、中学生の保護者ともに、年を経るごとに減少傾向にあったが、平成25年度の調査では、小学生、中学生で増加し、平成30年度さらに増加した。

おもに学校で身につけてほしいものとしては、「基礎的な学力」「受験に対応できる学力」「集団生活のルール」である。

おもに家庭で身につけるのがよいと回答されたのは、「基本的な生活習慣」「自分の身の安全の守り方」である。

（５）進路に関する考え方の変化

進学について、小学生、中学生の保護者ともに、7割以上が「子どもの学力に応じた指導」を望んでいる。

進路指導について、中学生の保護者では、「子どもの話をゆっくり聞くこと」よりも、「合格の難易度などの詳しい情報の提供」が重視されてきている。「希望校の校風や指導方針などの情報提供」は、小・中学生の保護者とも減少している。「就職に関する詳しい情報の提供」「保護者の話をゆっくり聞くこと」「保護者の希望を尊重した指導」は今回の調査でも低い割合となった。

「学校に行きたくないと思うことがある」子どもの割合は小学生、中学校ともに5割を超えている。

いじめについては、いじめをしたという子どもの回答より、「いじめを受けた」と回答した子どもの割合が高いことから、いじめに対する捉え方のずれがあると考えられる。また、「いじめを止めた」については、小学生、中学生ともに増加しており、「いじめはいけない」という意識が高まってきているといえる。昨今、子どもたちの抱えるストレスが複雑化・多様化していることから、今後も、学校や地域が、子どもたちにとって、安全で楽しく居心地のよい場所になるよう、家庭や地域と連携を深めていくことが大切である。

教科指導に関しては、今後も指導の充実を図り、下位のもの、特に小学校においては国語・道徳、中学校においては道徳に関して、授業改善に取り組んでいく必要がある。

教師への要望については、本調査の結果を真摯に受け止め、想いや願い、期待に込めていくことが大切である。今回の調査から、保護者の「多くの力を学校で身につけてほしい」という学校への期待が、今後も膨らんでいくことも考えられるが、家庭と学校とが子どもの成長を共に支え、連携を図りながら教育を共に進めていくことが必要であると考ええる。

4 子どもと携帯電話・スマートフォンについて

(1) 携帯電話・スマートフォンの所持率とルール

子どもの携帯電話・スマートフォンの所持率は、小学生4年生以上で5割以上、中学生では9割近くと高くなり、生活の一部になってきていることがうかがえる。子ども、保護者ともに、早期に所持することへの抵抗感が薄れ、低年齢化が進んでいるようだ。

スマートフォン等使用についてのルールは、小学生、中学生の保護者ともに7割程度は決めているようだ。また、フィルタリング・サービスについて、知っている小学生、中学生の保護者は増加傾向にあるが、フィルタリング・サービスについて知っている回答した保護者のうち、「利用している」と回答した割合は、小学校が6割半ば、中学校が7割強であった。

(2) 携帯電話・スマートフォンによる生活への影響

昨今、携帯電話やスマートフォン、ゲームなどの情報通信機器の普及が急速に進み、小学生、中学生ともに、利用時間が増えてきている。特にLINE、YouTube等の動画視聴が大半を占めているようだ。それに伴って、子どもの生活スタイルや人間関係も変化し、学習や読書、睡眠に費やす時間が減少したり、コミュニケーションが不足して、関係が希薄化したりするなどといったことも見られるのではないだろうか。現に中学生では、LINEによるトラブルが前回調査より倍近くになっている。

スマートフォン等の普及により、便利になってきたいっぽうで、子どもたちの生活への弊害も感じられる。

子どもの携帯電話・スマートフォンの所持率は、年々高くなっている。

携帯電話等を持たせていない保護者は、「まだ早い」という理由が最も多く、「勉強がおろそかになる」と続く。持たせていない保護者のうち、子どもにとって携帯電話等が必要だという回答は2割半ばであったが、持っていない子どもは、7割近くが「必要である」と回答しており、親と子の感じ方に違いがみられる。

スマートフォン等使用についてのルールは、小学生、中学生の保護者ともに7割程度は決めていると回答している。また、フィルタリング・サービスを利用している割合は、小学生が6割半ば、中学生が7割強であったが、どちらも決して高い割合とは言えない。携帯電話等によるトラブルに巻き込まれないよう、利用の際は、子どもの発達段階に応じたルールを決めて利用することが大切である。

携帯電話等の利用時間については、2時間30分以上が増加している。今後も、あやせ夜間ゼロ運動～ケータイ・スマホ、ゲーム機等の夜間ゼロ運動～の取組の普及を進め、家庭と学校が連携して、子どもたちが、心身ともに豊かに成長できるよう、環境を整えていきたい。